
【毎週水曜日21:00更新】Tomorrow ~第一部~

柊 煌時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【毎週水曜日21:00更新】Tomorrow 第一部

【Nコード】

N9033P

【作者名】

柊 煌時

【あらすじ】

記憶喪失してしまった雄太。

小学校6年生だと思っていたのに、中学に入る直前だった。自分には何がおこったのか、

中学の生活は、どうなってしまうのか。

2010年度後期から、週記となりました。

何卒、宜しくお願いします。

第一章 第一話 はじまり

起きてみると、周りの状況は理解出来なかった。

自分はどこにいるのか、何があったのか。

僕は今、小学校6年生で、明日は生徒会長としての運動会だったはずなのに。

ベットの上で眠っていた。

しかも、何かの筒が横に置いてあって、後ろの壁には、シートに入院した日が・・・確かこれは卒業式の日だ。

何がおこったのか、全く覚えていない。
暫くすると、医者が来た。

「雄太君、目が覚めたみたいだね」

「はい、でも、・・・今日は何月何日ですか？」

「どうしたんだい、昨日のことを覚えてないのかい？今日は3月18日だよ」

え？

第一章 第一話 はじまり（後書き）

指摘など、宜しくお願いします。

こんにちは。

Mathematicsとして初めての長編作品となります。

現在書き溜め状態なのですが、時間の都合によりUP出来ない状況が続いています

頑張っかけていけたらいいな．．．．．と。

第二話 記憶喪失？（前書き）

遅くなりました。

投稿する時間が取れ次第投稿するので、宜しく願います。

第二話 記憶喪失？

え？

3月18日だつて？

「ん？何かあったのかい？」

ええっと。

つまり、記憶喪失を本当にしてしまったのか？

「あの、すみません」

「え、どうしたんだい？」

「僕、10月からの記憶がないんです。」

（1時間後）

「脳に外傷はやっぱり見当たらないから、事故のショックの可能性が高いです。」

何かの拍子に思い出すことありますが」

やはり記憶喪失のようだ。

何かの拍子に、っていつても、めったに起こる事じゃないだろうし。

「これって、両親に言う事なのですか？」

それは出来れば避けたい。周りの人にそう言う目で見られたくないし。」

「それは本人の自由です。今の時点ではまだ何も言えないので。」

「では、今は言わないで置いて頂けますか？」

「はい。」

こうして自分の記憶喪失のことは親には隠すこととなった。
ばれないかは少し心配だが……

第二話 記憶喪失？（後書き）

グダグダになりそうですが、宜しく願いします。
指摘などは、宜しく願いします。

第三話 家族との再会と・・・・・・・・・・（前書き）

きりの良さげな所で投稿。

試験勉強しなきゃなあ・・・・・・・・

第三話 家族との再会と・・・・・・・・

それから小一時間。

僕は自分の記憶について考えていた。

最後の記憶は、10月23日、小学校の運動会の時だ。

それから5ヶ月間、記憶がない。

お医者さんの話によると、僕は昨日、事故に遭ったらしい。

頭を強打したらしく、一時は植物状態かも・・・・・・・・とも思われ
たらしい。

お医者さんは、とりあえず無事で良かった、とも言っていた。
生きていられたことは、単純に良かったと思う。もっとも、死んで
しまったり植物状態になってしまったりしていたら、そんなことも
考えられさえないだろうし。

とはいっても、記憶がない。僕がこの5ヶ月の間、何をしていたの
か。何を思っていたのか。

確か、日記もつけていなかったはずだから、その頃の自分は分から
ない。

特に、対人関係において、記憶がないのは、辛いと思う。どの人と
はどの位仲がよくなったのか、又は、悪くなったのか。

この人にはこの話題をしてはいけない、とか。

記憶喪失したことを隠しておく中で一番大変になるのはそれだろう。
安易に話してしまうことで、疑われることがあるのでは無いだろう
か。

それは嫌だった。出来れば、自分の弱い所など人には見せたくない。

ーコンコン

誰かがきた様だ。

「雄太君、調子はどうだい」
主治医の先生だ。

「調子自体は大丈夫です。でも……………」

「周りの人の変化は少しずつ慣れていけばいいと思うよ。」

「そうですね……………」

「あと、血液検査をしなくちゃいけないから、診察室に来てもらえるかい？」

「はい、分かりました。」

30分後、僕は血液検査が終わり、病室にもどって来ていた。

憶えている限りでは初めての血液検査だったので、少し緊張したのと、

気が遠くなりかけたのだが、なんとか大丈夫だった。

ーガラッ

「雄太！」

見ると、父さん達が病室に入ってきた。

「良かった、大丈夫だったのね。」と母さん。

「うん、大丈夫だよ。」

「兄貴が戻って来てくれて良かったよ」と弟。

父さん、母さん、弟。

家族がみんな一緒にいることが、こんなにも落ち着くことなのか、と。

こんなにも安らぐことができるのか、と。

家族の大切さを知った一瞬だったように思う。

「なあ、雄太。」

「ん、何？父さん。」

「雄太はなんで引かれたんだ？」

え……………？

父さん達は把握していなかったようだった。なぜ僕が事故に遭った

のか。

「不注意だったからかな。急に来たのもあるし。」
ありきたりな答えを返す。

ーコンコン

「神崎雄太君のご両親さん、雄太君の状態についての話があるので来て頂けますか？」

「ええ、分かりました、奥村先生。じゃあ、またあとでな、雄太。」
「う．．．．．うん」

3人が出て行くとき、奥村先生は僕に向かって小さく親指を出していた。

僕は頭を下げる。

あの先生は、とってもいい人なのだなあ、と僕が思っていると、

ーガラガラッ

少女が凄い勢いで入って来た。

第三話 家族との再会と・・・・・・・・（後書き）

次回、ヒロイン（予定）の登場です。

指摘などを宜しくお願いします。

第四話 再会（前書き）

元々の設定をかなり変更したので遅くなりました。
これが吉と出るか凶と出るかは自分次第ですよね
・ ・ ・ ・ ・

第四話 再会

「……真奈？」

病室に入って来たのは、真奈だった。

真奈とは、小学校1年生の頃からの友達で、あと和人、麻友を含めた4人でよく仲良く遊んだものだった。

僕の残っている記憶では、僕は麻友のことが好きで、和人は真奈のことが好きだった筈だ。

無論、今どいう関係なのかは分からないが。

「雄太君…大丈夫だったんだね。」

真奈は目が少し充血していて、目の下が少し膨れているように見える。かなり泣いてくれていたのだろうか。

それがどんな心からなのかは分からないが、そうしてくれていたのは嬉しい。

…なんでそんなことを考えているんだろうか？
考える必要はないんじゃないか？

「ああ、大丈夫だったみたいだ。お前こそ大丈夫か？目の下が少し腫れているぞ？」

「全然大丈夫だよ。」

真奈はそういつて笑ってみせる。その笑顔を見ても、もやもやした気持ちには晴れない。

考えてみようと思う。

まず、真奈は元々物静かな方だ。麻友だったら感情が表に出やすい

から、この位でも（見た目には）こうやって泣くこともあるかもしれないが、真奈は心配して声を掛けてくれることがあっても泣きはしないと思う。

そついうのがいいんじゃないか、と和人なら言うのだろうが。

僕はそれより、意見をはっきり言えてリーダーシップも取れる麻友の方がいいと思っていた筈なのだが…。

何なのだろう、この何かが引っ掛かっているような感覚は。

「…雄太君？」

「ああ、悪い。考え事してた。」

「もう、もう一度言うよ？…返事、考えてくれた？」
何の話だろう？

流石に記憶喪失してると分からないことが多い気がする。

その時、病室の扉が開いた。

麻友と和人だ。

「大丈夫か、雄太」

「元気になったかい？」

2人も、やっぱり少し泣いていたようで、麻友は少し目が赤く、和人も目が痛いのか、仕切りに瞬きをしている。

「ああ、多分大丈夫だと思う。」

やっぱり僕の知らない所で何かあったのだろうか。3人とも様子がおかしい。

その時、先生が入って来て、

「雄太君、血液検査をするから、来てくれるかな？」

「ええ、分かりました。和人、真奈、麻友、せっかく来てもらって悪いな。」

「別に大丈夫だから。また明日もくるぞ。」

「ああ、ありがとう、和人。」

そういつて僕は病室を出て、看護師の人に連れられて検査室へ向かった。

第四話 再会（後書き）

本当に進みが遅くてすみません。

これから宜しく願います。

第五話 退院（前書き）

久しぶりの投稿です。どうぞ。

第五話 退院

看護師さんに連れられて、検査室へ行く。

3人と別れたくはなかったなあ、とは思うものの、僕はついて行く。取り敢えず、分かった事は、僕を含めた4人は少なくとも仲が良いままだった、ということ。

それは喜ばしいことだと思う。それならば、どうにかやっていけるだろう、とも思うし。

検査室へ着いて、看護師の人と先生を待っていると、看護師さんは僕に話を振って来た。

「ねえ、雄太君。あの娘とって、コレなの？」

そういつて小指を立てる。

「覚えていないので分かりません。第一、あなたは僕が記憶喪失したの知ってますよね？」

赤の他人にそういうこと言われるとイラッとする。

お前には関係ないだろ、と。

「ああ、ゴメンね？」

言い方が気にいらないので黙っていた。

暫くしていると、やっと先生が来た。

「ああ、雄太君、待たせて悪かったね。じゃあ、問診を行います。」

「あれ、また血液検査なのだと思ったのですけど」

「ああ、あれは問診だと見舞いに来た人が諦めてくれない人がいる

んだよ。だから血液検査なら大体は大丈夫だから。」

ここに入院している人の中にも結構そういう人がいるのだそうだ。

問診が終わり、夜。

僕は窓の外をみながら、今日1日を振り返った。

記憶がなくなっても結構落ち着いていられるものだ。

親しかった友人と会うことが出来たりしたからなのだろうか。

そんなことを考えながら、僕は眠りに落ちていった。

それから数日経ち、3月24日。

身体の方には特に異常がないので、僕は退院することになった。

記憶のほうは相変わらず戻っていないのだが、それが誰にも言っていないのであるから仕方がない。

退院ということで、色々と準備をしているところに、真奈がやって来た。

「おはよう、雄太君」

「あ．．．ああ、真奈。おはよう。まだ午前中なのに来てくれてありがとう。もう、やっと退院だよ。」

「うん、おめでとう。所で、中学校には普通に来れそうなの？」

そう言いながら、真奈は僕の右足を見る。

幸いにも、骨折ではなく、打撲なので、軽く包帯と湿布だけで処理している。

まあ、今は右足はサンダルでなきゃ歩くことができないのだが。

「ああ、この位は大丈夫だよ。ちょっとトイレに行つて来るよ。」

「トイレの前まで一緒に行こうか？」

「いや．．．大丈夫だよ。そこで待つてて。」

「うん。」

その真奈の一言を、「お節介」ではなく、嬉しく思っている僕がいた。

第五話 退院（後書き）

前半が急展開過ぎましたね・・・。

これから少しずつ、頑張って行きたいと思います。

第六話 退院2

トイレから帰って来ると、主治医の先生が来ていた。

「おはよう、雄太君。今日は退院おめでとう。」

「ありがとうございます、奥村先生。やっと退院です。」

「ああ、両親の方ももういらっしゃっているそうだから、そろそろ行こうか。」

「はい、分かりました。」

真奈と一緒に、奥村先生の後続く。

記憶がある頃には無かったことなのだが、2人でこうして歩いているだけなのに、何だかドキドキしていた。

「そういえば、和人と麻友は？2人にも連絡は入れた筈なんだけど。」

「

「うーん、2人は忙しいんじゃないのかな？」

忙しい、とは何なのかは、少なくとも今の僕には分からない。

それも仕方の無いことなのかな、と思っている内に、

病院の入り口まで着いてしまったようだ。

「兄貴、退院おめでとう。あゝ兄貴はいいよなあ。頭もいいし、お見舞いに真奈さんみたいな可愛い人が来て。羨しいよ。」

到着早々弟の勇人が愚痴を言ってくる。

「じゃあ、もし勇人くんが怪我とかで入院したら、私がお見舞いに行つてあげるね。」

そう言いながら真奈は勇人に微笑みかける。
その顔が

「い．．．いや、秋月さんは兄貴の所に行つてください。」

そう言いながら勇人は赤面する。それを見て僕は少し笑うのだった。

「まあ、秋月さん。雄太の為なんかにお見舞いに来てくれて有難うね。」

「いえいえ、友達ですから．．．」

その後、母と真奈が話している。

「もう、雄太はこういう所が抜けているんだから。秋月さんは立派よねえ。あなたも中学生になるのだから、忙しいのに。」

「そんな事ないですよ。それに．．．私のせいで．．．．．」

「もう、そんな謙遜は良いんだから、ね？もう、あなたのそういう所も可愛いわ。将来立派なお嫁さんになれそうね！」

「は、はい．．．。」

どうやら真奈が負けてしまったようだ。

少しだけではあるが、顔が赤くなっている。

でも、なんでだろう。

真奈は僕の母とここまで仲がよかったのだろうか。

．．．．．覚えていない。

それは、怖いことなのだな、と改めて実感する。

僕の家族と真奈との間に、一体何があったのであろうか。

それは、全くわからなかった。

病院を出てきて、やっと家に帰る。

久しぶりの自分の部屋。

少しだけ変わった所もあるにはあるのだが、大体同じだ。

「もう、今日は疲れたなあ。やっと退院することはできた。これからはどうしていけばいいのだろうか．．．」

そんなことを呟きながら、僕は何となくベットに横たわる。

直ぐに、僕は眠りへと落ちて行った。

第六話 退院2（後書き）

ゆっくり・・・とはいっているものの更新は遅すぎですよね。

もっと精進します・・・。

次は夢の中のお話。

彼は自分の夢で、何をみるのでしょうか？

第七話 夢の中で・・・(前書き)

彼は夢のなかで・・・

第七話 夢の中で・・・

・・・僕は、歩いていた。

これは・・・小学校からの帰りだろうか？
僕は、一人・・・いや、二人で歩いていた。

寒空の元、僕も真奈も厚着をしていて、また首にはマフラーを巻いていた。

「・・・こんなように二人で帰るのなんて、何時ぶりだろうね。」

大分寒くなってきたからか、少し顔を上気させたかのように赤くさせながら、真奈が呟く。

「自分もきつと同じようになっていたのだろうな。主に別の意味で、ずっと4人で帰っていたからな。3人で帰ることはまあそこそこあったけれど、こうして2人も用事が重なるなんてこと、滅多に無かったからな。」

それからは暫く、2人は無言で、ゆっくりと歩いていく。

何か話題があればいいと思うのだが、普段はであればどんどん話題も浮かんできてくる筈なのに、何故か今日は思いつかない。

真奈は元々物静かな方なので、自分からはあまり話しかけることはしない。

だから2人つきりなのに、無言なのであった。

普段の僕であれば、この雰囲気は非常に好きではないので、会話でこういう状況は作らないように、ならないように心がけているので

あるが、

今の僕は幸せな気持ちでいた。

何も話していなくとも、ただすぐ側にいられるだけで。

僕にとって、言葉は不要に感じられたのだ。

「ねえ、雄太君」

不意に真奈が話し掛けてくる。

真奈から話し掛けてくるなど全く思っていなかったので、僕は少し狼狽える。

ドキドキする。

しかし、そんなものをおくびにも出さないようにしながら、

「ん、どうしたんだ、真奈。急に話し掛けて。」

とだけ答えた。

「生徒会主催の集会の準備、大丈夫？一応、内装についてはほぼ目処がついたんだけど．．．。」

生徒会主催による、新しい企画。

今まで教師などが決定してきたことの雑務などをこの学校の生徒会はこなしてきたのだが、僕らの代がそれを打破していこうと、初めて生徒が一から作る企画を考え出したのであった。

「こっちも、大分目処がついてきたよ。原稿はもう完成したし、自分の分位はもう覚えたから。」

「もう．．．流石だね。でも、これなら来週には予定通り何とかなりそうだね。」

そりゃそうだ。

折角の大きなイベント、失敗させる訳にはいかない。

「ああ、最後まで頑張らないとな。」

「うん、頑張つてね、生徒会長さん。」

真奈はそう言つて笑った。

第七話 夢の中で・・・（後書き）

この夢はまだ続きます。

これから週記になりますが、宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9033p/>

【毎週水曜日21:00更新】Tomorrow ~ 第一部 ~

2011年10月5日21時02分発行